探究的な学びによる概念的理解の獲得のための教育実践研究

～引揚者の排除と包摂から見る日本近現代史～

啓明学園中学校高等学校　佐藤　竜之

２．本研究の目的

・「逆向き設計」・「概念的理解」に焦点を当てた授業デザイン

仮説：問いを中心とした課題設定と探究的な学びの手法を用いることで、
概念的な理解を獲得できる

・日本史探究の授業実践

・授業使用プリント　啓明学園ホームページ

「令和5年度　日本私学教育研究所　委託研究成果報告」

（https://www.keimei.ac.jp/jsh/info/news/15392/）

３．テーマ設定

・歴史総合：「統合と分化」→「排除と包摂」

環太平洋における人の移動：ハワイ→ブラジル→満洲/勢力圏・非勢力圏

令和2年度日本私学教育研究所　委託研究　研究題目

「『本質的な問い』を中心にした歴史総合を見据えた授業デザイン」

・日本史探究：「満蒙開拓団」・「引揚者」の戦後

→「排除と包摂」を引き受ける日本分野に焦点をあてた題材

４．授業デザインの方法論（「逆向き設計」）

「逆引き設計」による授業デザインとルーブリックの作成

・Grant Wiggins, Jay McTighe, 2005, *Understanding By Design,* Expanded 2nd Edition =2012（西岡加名恵訳）『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法』日本標準.

・奥村好美・西岡加名恵(編著), 2020, 『「逆向き設計」実践ガイドブック　『理解をもたらすカリキュラム設計』を読む・活かす・共有する』日本標準.

・E FORUM 京都大学大学院教育研究科　「教員研修用ワークシート」（2023年1月21日，https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/seika/worksheet/）

佐藤卓己	読書する歴史	思考する歴史	叙述する歴史
佐藤学	対象との対話	自己との対話	他者との対話
歴史学	史実認識	解釈	叙述

４．授業デザインの方法論（「概念的理解」）

○「逆向き設計」における「本質的な問い」：

「包括的な本質的な問い」「トピックごとの本質的な問い」

「本質的な問い」→「問いの構造化」

・荒井雅子, 2019,「冷戦と世界経済――史資料を批判的に読む練習」原田智仁編著『高校社会「歴史総合」の授業を創る』明治図書, 140-149.

○「概念的理解」のための「３つの問い」

Concept-based units use the three main types of questions: factual, conceptual, and debatable. p56.

事実に関する問い（知識）

概念的な問い（理解/思考）

議論を喚起する問い（価値観）

- 事象の推移や展開を考察し理解を促すための課題
- 事象の意味や意義、関係性などを考察し理解を促すための課題
- 諸事象の解釈や画期を考察し表現するための課題

４．授業デザインの方法論

・「問い」の設定（特に「議論を喚起する問い」の設定）

・パフォーマンス課題の設定/評価方法（ルーブリック）の設定

・「事実に関する問い」と「概念的な問い」の設定　→　授業内容の設定

《第一時》 教師からの講義（１５分）・個人での資料の読み取り/解釈

《第二時》 「事実に関する問い」・「概念的な問い」について共有

《第三時》 「議論を喚起する問い」について共有・発表準備

《第四時》 各班発表　→　パフォーマンス課題への取り組み（個人）

〇 授業展開の構造

「対象との対話」：資料を読み取る

「自己との対話」：資料の内容について自分なりの考えをまとめる

「他者との対話」：グループワーク＆発表より他者の視点や知識を獲得する

「自己との対話」：パフォーマンス課題への取り組み＆学びによる自身の変容を振り返る

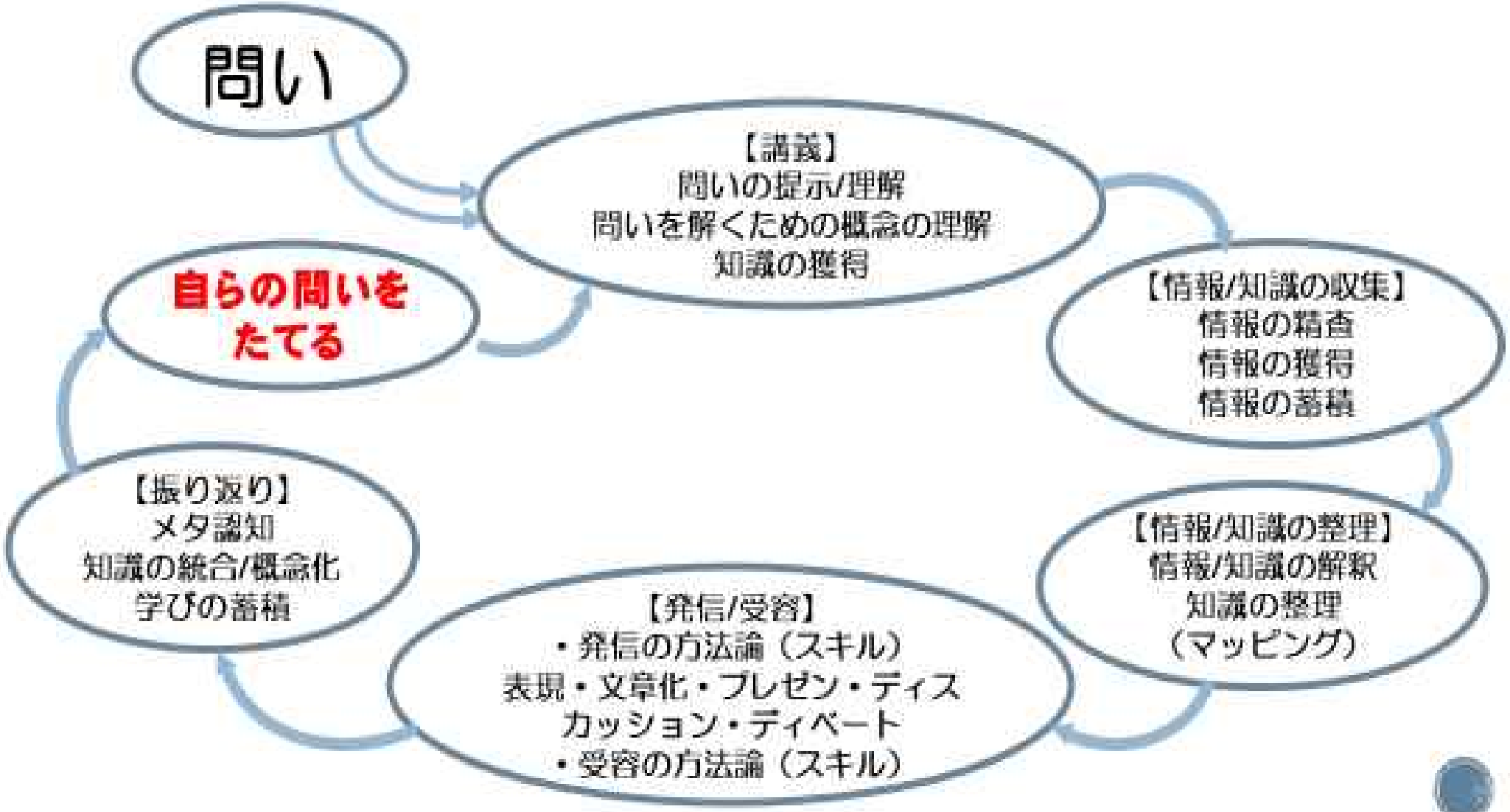
議論を喚起する問い

・パフォーマンス（論述）課題のテーマとして設定

満蒙開拓団の引揚者は、戦後の日本社会にどのように「受け入れられた」のか、またはそうでは「なかった」のか。五木寛之の「在日日本人」という表現が、満蒙開拓団の引揚者にとっては、どの程度あてはまると言えるのか。史資料を踏まえた上で、あなたの考えを述べなさい。（600字以上～800字程度）

・佐藤竜之, 2023,「教科横断型授業における授業デザインと評価の在り方の考察 : 探究学習を教科横断で実施するための方法論の開発」東京私立中学高等学校協会東京私学教育研究所(編),『東京私学教育研究所紀要』東京私立中学高等学校協会東京私学教育研究所.において実施した地歴と国語の教科横断的授業の取り組みをベースにして問いを構築した。

探究学習のサイクル



佐藤竜之, 2023,「教科横断型授業における授業デザインと評価の在り方の考察：探究学習を教科横断で実施するための方法論の開発」東京私立中学高等学校協会東京私学教育研究所(編),『東京私学教育研究所紀要』東京私立中学高等学校協会東京私学教育研究所.

「歴史的思考力」とは？

- 資料（史料）を批判的に読む力
- 歴史的文脈を理解する力
- 歴史的な変化を因果的に理由付ける力
- 歴史的解釈を批判的に分析する力
- 歴史を現代に応用する力
- 歴史を叙述する力（自分の立ち位置を理解して）
- **歴史的事実、歴史の解釈から「問い」を立てる力**

授業実践内容

第一時

◎分析の視点「排除」と「包摂」〔思考の枠組み〕

・近代→国民国家と資本主義
　　明治維新　国民国家の誕生　「統合」と「分化」
　　「日本人」の誕生
・「日本人」の誕生→誰が「日本人」か / ではないか
　　→「排除」と「包摂」の理論
・近代国民国家が創り出した「日本人」を相対化できるか
・「排除」と「包摂」の主体は誰か？
　「排除される」のは「誰」か？　「排除する」のは「誰」か？
　「包摂される」のは「誰」か？　→　「包摂された」と「感じる」のか？
　「包摂する」のは「誰」か？
・どのような「方法」なのか／どのような「基準」（境界）なのか？
・このテーマは、現代における諸課題には、どのようにつながるのか？

授業使用PPT

第一時

「折りたたまれた帝国」（帝国の解体）〔概念の解説〕

１９４５年８月１５日（という幻想）

- 「帝国」の解体　→　植民地の喪失
- 「帝国」の解体に伴う、「影響」とは？

　→　「帝国」の解体にともなう、「ヒト／人の移動」

　→　「日本」が「折りたたまれた帝国」として、その範囲を局限する中で、
　　「日本」および「日本人」にはどのような「影響」があったのか？

　→　そして、その「影響」はいつまで「続いた」のか、「続いている」のか

- 「日本」の境界の変更　→　その範囲は？ その根拠は？
- 「日本人」の変更　→　その範囲は？ その根拠は？

　では、「日本人」とは誰か？

　引揚者は「いつ」、「日本人」になることが出来たのか？

　　（もしくは、なれなかったのか？）

授業使用PPT

満蒙開拓団と引揚

・約660万人以上にのぼる外地からの復員・引揚

・満洲からの民間人の集団引揚　約150万人

cf：約24万5000人の満洲引揚犠牲者

→約8万人が開拓団の犠牲

ex:満蒙開拓団　14年で約27万人（計画の5.4%）

ブラジル移民　34年で約19万人

・ソ連の満州侵攻（1945年8月9日）

関東軍は開拓団の成人男子約5万人を招集、残された老人・女性・子供・障がい者

→逃避行と集団自決・「難民」化

・中国残留孤児(中国残留孤児・残留婦人)約1万3千人

実際の生徒の学習活動の様子

2023 年度　日本史探究　研究授業　　2023 年 12 月 2 日・7 日

日本史探究　引揚者の戦後～満蒙開拓団からの引揚者の排除と包摂～　教p325-352 教p286-308　No,2

パフォーマンス課題②の問いに対する仮説（今現在、自分が考えることが出来る範囲で書いてください。予想などを交えて書いても可です。）

受け入れられなかったんだと思う。日本で暮らす日本人でありながらどこかなじめない異質さを感じていたことが在日日本人という表現につながったのだと思う。

○探究課題 1　事実に関する問い

- なぜ満蒙開拓団の引揚者は大変な思いをしながら帰国したのであろうか（教科書 p331 より）。
- なぜ引揚は 1950 年代後半までかかることになったのか。
- 冷戦とは何か。また、冷戦が戦後の日本及び引揚事業にどのような影響を与えたのか。
- 農地改革とはどのような政策か。また、なぜ実施されたのか。さらに、この農地改革と戦後開拓とにはどのような関係があるのか。

満州はソ連軍侵攻によって戦場となり、満蒙開拓団の人々はソ連軍に加え、日本の敗戦を知った原地の人も日本人を襲撃したため大変な思いをしながら帰国することになった。引揚が1950年代後半までかかることになった理由は主に3つある。1つ目は敗戦後も日本政府が難民を日本に帰さず中国東北地方に土着させる方針を繰り返したこと。2つ目はGHQも軍人・軍属の復員を優先し、民間人の帰国を後回しにしたこと。3つ目は中国東北地方を実効支配していたソ連も、日本人難民の人命の保護、日本への引揚、送還にはまったく無関心であったことが挙げられる。また、引揚がはじまっても鉄道や橋が破壊されている状況の中帰るための船に乗れるのは出航場所の葫芦島に自力で行ける人だけだったことも理由の1つだろう。

冷戦とは第二次世界大戦後の米・ソの厳しい対立のことで武力は用いないが、アメリカを盟主とする資本主義・自由主義陣営とソ連を盟主とする共産主義・社会主義陣営の間に激しい対立・抗争、国際的な緊張状態にあった。戦後日本は資本主義陣営であるアメリカと結んだために、中国とは対立関係を断ち切ることになった。そして、その影響を受けて日本政府は引揚事業も打ち切ることとなった。

農地改革はGHQが日本の対外侵略の重要な動機を農民層の弱さとし、それを解決するために寄生地主制を除去し安定した自作農経営を大量に創出する農地改革の実施を求めたもの。戦後開拓も食料不足への対策のために

◎時系列/因果関係 /知識のマッピング（メモ）

満蒙開拓団
→ 中国の植民地支配と
ソ連国境の防衛を目的に入植を進める国策
↓
日本の戦況悪化・ソ連軍侵攻
↓
満州は戦場に
ソ連軍に加え、敗戦を知った原地の人も日本人を襲撃

農地改革
GHQが農民層の弱さが日本の対外侵略の重要な動機となったとし
寄生地主制を除去、安定した自作農経営を大量に創出する農地改革の実施を求めた。

+1946/5～引揚始まるが→鉄道や橋が破壊
船に乗れたのは出航場所 葫芦島に自力で行ける人だけ

なぜ長かったか
① 1945年8月以降も日本政府が難民を日本に帰さず
中国東北地方に土着させる方針を繰り返した
② GHQも軍人・軍属の復員を優先し、民間人の日本人難民の帰国を後回し
③ 中国東北地方を実効支配していたソ連も、日本人難民の生命の保護、
日本への引揚、送還にはまったく無関心

戦後開拓
第二次世界大戦後の引揚者や復員者の（戦争傷休）労働力吸収、および食糧不足への対策を目的としてはじめられた。

1958年 日本政府は引揚事業そのものを打ち切った
→ 戦後 日本はアメリカ＝資本主義陣営となったことで
中国と対立関係を断ち切った。

2023年度　日本史探究　研究授業　　2023年12月2日・7日

日本史探究　引揚者の戦後～満蒙開拓団からの引揚者の排除と包摂～　㊝p325-352 ㊟p286-308　　No,2

パフォーマンス課題②の問いに対する仮説（今現在、自分が考えることが出来る範囲で書いてください。予想などを交えて書いても可です。）

受け入れられなかったんだと思う。日本で暮らす日本人でありながらどこかなじめない異質さを感じていたことが在日日本人という表現につながったのだと思う。

○探究課題１　事実に関する問い

・なぜ満蒙開拓団の引揚者は大変な思いをしながら帰国したのであろうか（教科書 p331 より）。
・なぜ引揚は 1950 年代後半までかかることになったのか。
・冷戦とは何か。また、冷戦が戦後の日本及び引揚事業にどのような影響を与えたのか。
・農地改革とはどのような政策か。また、なぜ実施されたのか。さらに、この農地改革と戦後開拓とにはどのような関係があるのか。

満州はソ連軍侵攻によって戦場となり、満蒙開拓団の人々はソ連軍に加え、日本の敗戦を知った原地の人も日本人を襲撃したため大変な思いをしながら帰国することになった。引揚が1950年代後半までかかることになった理由は主に3つある。1つ目は敗戦後も日本政府が難民を日本に帰さず中国東北地方に土着させる方針を繰り返したこと。2つ目はGHQも軍人・軍属の復員を優先し、民間人の帰国を後回しにしたこと。3つ目は中国東北地方を実効支配していたソ連も、日本人難民の人命の保護、日本への引揚、送還にはまったく無関心であったことが挙げられる。また、引揚がはじまっても鉄道や橋が破壊されている状況の中帰るための船に乗れるのは出航場所の葫芦島に自力で行ける人だけだったことも理由の1つだろう。

冷戦とは第二次世界大戦後の米・ソの厳しい対立のことで武力は用いないが、アメリカを盟主とする資本主義・自由主義陣営とソ連を盟主とする共産主義・社会主義陣営の間で激しい対立・抗争国際的な緊張状態にあった。戦後日本は資本主義陣営であるアメリカと結んだために、中国とは対立し関係を断ち切ることになった。そして、その影響を受けて日本政府は引揚事業も打ち切ることとなった。

農地改革はGHQが日本の対外侵略の重要な動機を農民層の窮乏とし、それを解決するために寄生地主制を除去し安定した自作農経営を大量に創出する農地改革の実施を求めたもの。戦後開拓も食料不足への対策のために

◎時系列/因果関係 /知識のマッピング（メモ）

Q 満蒙開拓団

→ 中国の植民地支配と
ソ連国境の防衛を目的に入植を進める国策

↓

日本の戦況悪化・ソ連軍侵攻

↓

満州は戦場に

ソ連軍に加え、敗戦を知った原地の人も日本人を襲撃

Q 農地改革

GHQが農民層の窮乏が日本の対外侵略の重要な動機となったとし
寄生地主制を除去、安定した自作農経営を大量に創出する農地改革の実施を求めた。

Q なぜ長びいたか

+ 1946/5〜引揚始まるが → 鉄道や橋や破壊

船に乗れたのは出航場所 舞鶴に自力で行ける人だけ

① 1945年8月以降も日本政府が難民を日本に帰さず
中国東北地方に土着させる方針を繰り返した

② GHQも軍人・軍属の復員を優先し、民間人の日本人難民の帰国を後回し

③ 中国東北地方を実効支配していたソ連も、日本人難民の生命の保護、
日本への引揚、送還にはまったく無関心

Q 戦後開拓

第二次世界大戦後の引揚者や復員者（職業傷体）の労働力吸収、および食糧不足
への対策を目としてはじめられた。

Q 1958年 日本政府は引揚事業そのものを打ち切った
→ 戦後日本はアメリカ＝資本主義陣営となったことで
中国と対立・関係を断ち切った。

第三時

高度経済成長を機に徐々に受け入れられ始めた

・昭和55年、長崎県壱岐で農業が芽を出した。現地は風が強くビニールハウスを使った農業は困難だと考えられていた。

・ビニールハウスの設営に積極的であったのは、地元民より開拓者のほうであったという。

・その後、地元民はビニールハウスを農業の効率を高める新しい試みだと評価し、開拓者は地域社会に受け入れられていった。

生徒発表用スライド

パフォーマンス（論述）課題
2事例を紹介

引揚者たちは、はじめは、日本本土にずっと住んでいた人々からは肯定的には受け入れられず、理解をされにくかったのではないかと思う。しかし、徐々に年数を経ていくうちに引揚者に対しての理解が深まっていき、段々と抵抗感も少なくなり一部では受け入れられていくといったこともあったのではないかと考える。そのため、長期間に渡って差別を受けたわけではないと思う。確かに、五木が書いた文章には、土地も家も持たない帰国民として、さまざまな差別を受けることになったという記述がある。同じ、日本人ではあるものの生まれ育った国の文化や価値観が違う人間を受け入れるのに抵抗を感じていたことから差別などぞんざいに扱われていたのではないかと推測できる。また、残留日本人の生命をいかに守るかを想定した者は、政府や軍部の内外ともに皆無であったという記述がある（加藤聖之より）。これにおいても引揚者の生命、存在が軽視されていたことが推測できる。この二つの点から、敗戦直後に帰国した引揚者らは、快く受け入れてもらえなかったのではないかと考えた。戦後の農地改革では、地主制の解体を国が促進し、自作農を創設することで貧富の差をなくすといったために行われたものである。また、1945年から実施された戦後開拓という政策は、食糧増産を目的として実施された。これは、引揚者の生命・財産（生存権）を補償することも視野に入れた政策であったということがうかがえる。もちろん、引揚者だけでなく、国民全体が食料に苦しんでいたため国民全員を対象にした政策でもあることは指摘しないといけない。しかし、農林、外務両省、厚生省援護局などの支援を受けて、引揚が行われ、再入植の斡旋などが行われるなど、引揚者のための政策が実施された事実がある。決して、表面的には受け入れるといった政策ではないことが読み取れると考える。もし、表面的にしか受け入れないとしたらここまでの取り組みはしないのではないかと考える。以上の理由から高度経済成長なども経て、年数を重ねていくうちに徐々に受け入れられようになっていったのではないかと考える。　（870字）

- 立場：
- 引揚者たちは、はじめは、日本本土にずっと住んでいた人々からは肯定的には受け入れられず、理解をされにくかったのではないかと思う。しかし、徐々に年数を経ていくうちに引揚者に対しての理解が深まっていき、段々と抵抗感も少なくなり一部では受け入れられていくといったこともあったのではないかと考える。そのため、長期間に渡って差別を受けたわけではないと思う。
- 資料：『海外引揚の研究—忘却された「大日本帝国」』・『戦後開拓史』・『引揚と援護三十年のあゆみ』・『満洲開拓史』
- 主張：

〇戦後開拓という政策は、食糧増産を目的として実施された。これは、引揚者の生命・財産（生存権）を補償することも視野に入れた政策であったということがうかがえる。

〇農林、外務両省、厚生省援護局などの支援を受けて、引揚が行われ、再入植の斡旋などが行われるなど、引揚者のための政策が実施された事実がある。

〇高度経済成長なども経て、年数を重ねていくうちに徐々に受け入れられようになっていったのではないかと考える。

満蒙開拓団の引揚者は戦後の日本社会に表面的、制度的には受け入れられたが、内面的には本土の日本人とは大きな隔たりがあり、受け入れられなかったという側面も、またあると考える。満蒙開拓団の引揚者は、戦後日本社会から締め出された朝鮮人などと比べて、国籍上は日本人というくくりであった点は、彼らが日本に受け入れられる大きな要素であると思う。彼らを日本本土に戻すための取り組みは冷戦構造の中で、後回しになったりしつつも常に行われてきた。また、戦後の食糧確保とともに、彼らの職業確保を一つの目的としている取り組みである戦後開拓（食糧増産が基本的な方針だが）が実施されたりと、日本社会が彼らのための制度をいくつも実施していたため、行政的には引揚者は受け入れられていたといえるはずだ。しかし、引き揚げたのち、故郷での居場所がなく、戦後開拓の中で新しい土地に入植した人。さらには、再び移民としてブラジルやドミニカに移民として出て行った人もいた。戦後開拓の中で、新しく入植した場所になじめない人々や、開拓団として他の地域に入植したものの大きな摩擦もあったりした。資料にも「日本人の生活になじめなくて困った」（『「在日日本人」の白けた戦後』より。）という言葉や、「「引揚者」という言葉は差別と結びついていた。ようやくたどりついた母国で、土地も家も持たない帰国難民として、さまざまな差別を受けることになったのである。」（五木寛之より）というような記述がある。このように引揚者である人々の多くは現地の日本人の差別意識を感じていたのではないだろうか。特に幼少期、自我形成に重要な時期を日本でない場所で過ごした引揚者は、国籍は日本人であるというだけで、日本のその土地特有の文化や方言は身についておらず現地の日本人と同一視できるものではなかったのではないだろうか。また、満洲と日本本土の戦争体験の違いも、理由の一つに挙げることができる。そういった状況があった中で、本土の日本人と差別化する言葉として「在日日本人」という表現が当てはまるのだろうと考える。

（859字）

- 立場：

　満蒙開拓団の引揚者は戦後の日本社会に表面的、制度的には受け入れられたが、内面的には本土の日本人とは大きな隔たりがあり、受け入れられなかったという側面も、またあると考える。満蒙開拓団の引揚者は、戦後日本社会から締め出された朝鮮人などと比べて、国籍上は日本人というくくりであった点は、彼らが日本に受け入れられる大きな要素であると思う。

- 資料：『「在日日本人」の白けた戦後』・『戦後開拓史』・『新版　戦後引揚の記録』
　　『海外引揚の研究—忘却された「大日本帝国」』

・主張：

〇彼らを日本本土に戻すための取り組みは冷戦構造の中で、後回しになったりしつつも常に行われてきた。
〇戦後開拓（食糧増産が基本的な方針だが）が実施されたりと、日本社会が彼らのための制度をいくつも実施していたため、行政的には引揚者は受け入れられていたといえるはずだ。
〇再び移民としてブラジルやドミニカに移民として出て行った人もいた。
〇戦後開拓の中で、新しく入植した場所になじめない人々や、開拓団として他の地域に入植したものの大きな摩擦もあったりした。
〇特に幼少期、自我形成に重要な時期を日本でない場所で過ごした引揚者は、国籍は日本人であるというだけで、日本のその土地特有の文化や方言は身についておらず本土の日本人と同一視できるものではなかったのではないだろうか。また、満洲と日本本土の戦争体験の違いも、理由の一つに挙げることができる。「在日日本人」という表現が当てはまるのだろうと考える。

大学入試との関連

- 2021年度　一橋大学　前期日程　日本史　問題Ⅱ　問4
- 2012年度　東京大学　前期日程　日本史　第4問
- 2017年度　センター試験　日本史B　第1問　問5

大学入試との関連　一橋大学

- 2021年度　一橋大学　前期日程　日本史

  問題Ⅱ

  問4　1940年から1955年までの間、東京府（東京都）の人口がいったんは急減した後、増加した社会的原因を述べなさい。

大学入試との関連　東京大学

・2012年度　東京大学　前期日程　日本史

第4問

次の表は、日本の敗戦から1976年末までの、中国およびソ連からの日本人の復員・引揚者数をまとめたものである。この表を参考に、下の(1)・(2)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

～～設問中略～～

A　表に見るように多数の一般邦人が、中国に在住するようになっていたのはなぜか。20世紀初頭以降の歴史的背景を4行以内で説明しなさい。

B　ソ連からの日本人の帰還が、（２）のような経緯をたどった理由を、当時の国際社会の状況に着目して、2行以内で説明しないさ。

大学入試との関連　センター試験

・2017年度　センター試験　日本史B

第1問　問5

下線部Cに関連して、Tが見た次の写真Ⅰ～Ⅲについて、古いものから年代順に正しく配列したものを、次ページの①～⑥のうちから一つ選べ。

Ⅰ　船で舞鶴へ到着した大陸からの復員軍人や引揚げ者たち

Ⅱ　満州・内蒙古の開拓への参加を青少年に訴えるポスター

Ⅲ　宣戦布告後、日本海航行に関して出された電報

７．《成果》

・「３つの問い」を引揚者の戦後を紐解くための重層的な問いとなるように構造化
・概念的な理解の獲得　＋　日本の近現代史を理解するための基礎的な知識の獲得
・史資料をベースに具体的な事例を他の事例と参照、比較・対照させながら一般化
　その一般化を具体的な事例をもとに反証する

　　<u>具体と抽象を往還する思考の活動</u>

《課題》

・「３つの問い」が段階的に抽象的　→　「どの程度まで抽象化/具体化するのか」
　→具体と抽象の往還、概念を活用した議論
　　「どの程度」まで具体的な説明を要するのかについて、問いから求められる
　　要求を理解できるようにする足場掛けの仕組みを考えていく必要性

今後の展望

・「社会に開かれた教育課程」

学習指導要領　「３　内容の取扱い　（１）　ウ」

「年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館やその他の資料館などの施設を調査・見学するなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること。」

《2024年度 本校で取り組み予定の内容》

〇夏季特別学習（夏期講習）

・満蒙開拓平和記念館　博物館における「学び」／「記憶」と「表象」

・所在地　〒395-0303　長野県下伊那郡阿智村駒場711-10

〇冬期特別学習（冬期講習）

加藤聖文　中国帰国者支援・交流センター　帰国者二世・三世の語り

※戸籍・国籍・パスポート・境界 といった問題への接続可能性

探究的な学びによる概念的理解の獲得のための教育実践研究

～引揚者の排除と包摂から見る日本近現代史～

啓明学園中学校高等学校　佐藤　竜之

sato-r@keimei-std.jp　researchmap